

2024/4/20

理事長挨拶



奥山隆平
(信州大学
医学部
皮膚科学
教室)

今年度の学術大会は、5月10〜11日にシーガイアコンベンションセンター（宮崎市）において開催されます。この学術大会を通して、学会員の方々の日々の診療の成果を広く発信いただくとともに、活発に意見交換いただくことで、皮膚がんの診療の新世界を拓く機会になればと切に願っております。直近の学術大会は新型コロナウイルスの蔓延に振り回されました。天野正宏教授をはじめ宮崎大学医学部皮膚科学教室の皆様にはご負担をおかけしますが、どうぞよろしくお願いします。

さて、皮膚がんの診療の領域では、新しい治療薬の出現や既存薬剤の適応拡大といった明るい話題もごさいますが、診療をより良いものにしていく上で臨床データの積み上げがいくことが極めて重要であることに変わりはありません。現在、皮膚がん予後統計委員会の加藤則人先生（京都府立医大皮膚科）が中心となって、皮膚がんのレジストリの設立が進められています。悪性黒色腫、皮膚リンパ腫、乳房外パジェット病、血管肉腫の4疾患に関して臨床情報集積がスタートしようとしています。集積されたデータを踏まえ、今後日本人の皮膚がんのより良い診療の知見が得られ

てくるのが期待されます。学会員の多くの方々にも多大なご協力をお願いするプロジェクトです。ご尽力の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

また、皮膚悪性腫瘍診療ガイドラインの第4版の作成が、皮膚悪性腫瘍診療ガイドライン作成委員会（中村泰大委員長）のもと進められています。従来の6疾患に新たにメルケル細胞癌を加え、7疾患に関してガイドラインの作成が図られていきます。統括委員ならびに作成委員の先生がたに改めて感謝申し上げます。

さらに、皮膚がん（皮膚悪性腫瘍）の病理取扱規約の改訂が、安齋眞一先生のリーダーシップのもと、進められています。皮膚悪性腫瘍診療ガイドライン第2版以来、長い間改訂がなされておられません。最近の知見を反映させるとともに、多数の病理医の方々にも協力をいただいております。皮膚がんに関して、病理報告書の記載項目などの均てん化が、ますます充実することを期待しております。

皮膚がん診療では、外科治療はもとより、薬物療法や放射線治療の他、緩和ケアも重要であり、皮膚科医、形成外科医、放射線科医、病理医、腫瘍内科医、基礎研究者が相互に協力することが欠かせません。多様性を尊重することで、当学会の活動がさらに活発になることを期待しております。皆様のご理解、ご協力をお願いいたします。

大会案内



天野正宏
(宮崎大学医学部
感覚運動医学講座
皮膚科学分野)

第40回を迎える学術大会のテーマは「ウイルスの発癌機構を極める」と致しました。私たちは開講以来、南九州に多いEBV（ヒトT細胞白血病ウイルス1型 およびHTLV（成人T細胞白血病/リンパ腫）の診療・研究を続けて参りました。EBVは主に母乳から感染しおおよそ60〜70年後にATLLを発症するウイルスで、その約半数は皮膚浸潤を伴います。特別講演では京都大学血液内科の高折晃史教授に「ウイルスと生体防御」についてお話をいただきます。またEBVはATLL以外の皮膚疾患、脊髄症、ぶどう膜炎などの原因にもなり、EBVに関連疾患のシンプソウムも開催します。

EBVに加え、EBウイルス、モク、メルケル細胞がんの原因となるMCPKなどの発癌機構を議論するシンプソウムも開催します。また皮膚がんの外科的手技に関するシンプソウムやワークシヨップを開催します。特に若手医師に向けて、外科的な手技に広く興味を持ってもらうため、外科的手技に長けた形成外科医や皮膚外科医の先生方にお話していただきます。その他、皮膚病理、ダーモスコピーによる皮膚がん診断、緩和医療、ヒ素と発癌などの教育講演を著名な先生方にお願ひしてまいります。お陰様で一般演題も160題ほど集まり、参加された先生方を飽きさせない内容となっております。

今回はウェブによる配信を行わず、久しぶりに現地開催のみと致しました。会場のシーガイアコンベンションセンターは、宮崎市中心部から少し離れていますが、シャトルバスを約一時間間隔で運行します。懇親会はカクテルパーティー形式にして、宮崎名物のチキン南蛮や地鶏の炭火焼き、地元の焼酎などを

用意する予定です。かしこまらず和気あいあいと楽しんでいただけたらありがたいです。本大会を通じて、ウイルスの発癌機構や皮膚外科に関心を持っていただき、今後の皮膚がんの研究や診療の発展につながることを期待しています。約30年ぶりの宮崎での開催です。温暖な気候、豊かな自然、美味しいものがたくさんある宮崎へ、この機会にぜひお越しください。

皮膚がん 予後統計調査委員会

加藤則人（京都府立医科大学皮膚科）

本委員会は、皮膚悪性腫瘍の症例数や新規発症数、発症年齢などの臨床統計を把握するとともに、累積データから、病型の変動、治療成績や生存率の推移などの予後調査と臨床研究を行う事を目的にしています。これまで悪性黒色腫と皮膚リンパ腫について調査を継続しており、皮膚リンパ腫については発生状況の調査を、悪性黒色腫については2005年から予後データを含むデータ集積を行ってきました。

2024年からは、委員会のメンバーを大幅に増員し、従来の悪性黒色腫の調査をベースに、皮膚リンパ腫、乳房外パジェット病、皮膚血管肉腫についても、予後データを含む臨床情報をデータベース化するレジストリ研究を開始しました。皆様のご協力をお願いいたします。

会員の現況

会員現況 (令和6年2月26日現在)	
会員数	
1) 一般会員	1,380名
2) 賛助会員	8社
東レ(株) (株)ミノファーマ	製薬
ン製薬	ノバルティス
ファーマ(株)	常盤薬品工
業(株)ノブ	事業部
リアル(株)	(株)ピーシー
ルジャパン	カシオ計算
機(株)	アツヴィ合同
会社	
3) 名誉会員	24名
4) 功労会員	76名
合計	1,488名

皮膚がん診療 ガイドライン作成委員会

委員長 中村泰大

(埼玉医科大学国際医療センター
皮膚腫瘍科・皮膚科)

まず会員の皆様へのご報告となりますがガイドラインの名称は、現在改訂中のがん取扱規程との名称統一のため、「皮膚悪性腫瘍診療ガイドライン」から「皮膚がん診療ガイドライン」となります。以後お見知りおきのほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

さて、現在ガイドラインは前版（第3版）からの改訂作業が順調に進んでおり、既に数グループではクリニックエスチョン推奨度決定のためのパネル会議も終了しております（2024年3月6日現在）。一統括委員として複数のパネル会議にオブザーバー参加させて頂いておりますが、前版よりもガイドライン委員の人数も増え、GRADE systemでのガイドライン作成を前回経験された先生方が残っていることもあり、パネル会議での議論・投票も明らかに前版よりも充実していることを実感します。また、いくつかのグループでは患者会代表の方にもパネル会議にご参加頂いており、患者さん目線の議論が加わることがガイドライン推奨決定に非常に重要であることを感じさせられました。

ガイドラインは当初の予定から大きな遅れなく、2024年度には公開できると見込んでおります。これもひとえに日常の診療・研究と御多忙ななか膨大な改訂作業に尽力頂いております。ガイドライン委員の先生方、改訂作業を陰で支える統括委員の先生方、改訂のご指導を頂いております日本皮膚悪性腫瘍学会、日本皮膚科学会のおかげと、日々心より感謝しております。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。皮膚がん診療に従事する先生方に、updateした質の高いガイドラインを遅滞なく提供できますよう、作成委員会一丸となり引き続き改訂作業に従事して参りたいと存じます。

皮膚がん取り扱い規約 改訂委員会

委員長 安齋眞一

(PCL Japan 飯田橋病理・細胞診センター)

皮膚悪性腫瘍に関する取り扱い規約は、2010年に第2版が発刊されて以降、10年以上改訂されてきていませんでした。近年の皮膚悪性腫瘍診療の進歩などもあり、改訂が強く望まれていたところでした。この度、日本皮膚悪性腫瘍学会でその改訂作業が開始されることとなり、私が委員長として作業を進めさせていただいております。

今回改訂するにあたりもつと留意したのは、前版作成時には時代の趨勢もあり、多くのガイドラインの内容を含んでいたものを、病理検査依頼書・病理検査報告書・病期分類・検体処理・所見評価・病名分類表・主要疾患の解説、にしばったものとし、ガイドラインとの明確な棲み分け・差別化を図ることです。もちろん、ガイドライン作成委員会とは緊密な連携をとり、用語の統一、内容重複の回避などもしっかり行っています。また、前版は皮膚科医のみで作成されていましたが、日本皮膚病理解析学会の協力を得ることにより多数の病理医と、規約をもとに利用することになる形成外科医にも参画していただいております。総勢32名の態勢で作業を行っています。

規約の名称も、前版までは「皮膚悪性腫瘍取り扱い規約」でしたが、今版より、他臓器のものとの整合性のこともあり「皮膚がん取り扱い規約」と変更しております。

現在、作業は順調に進行しており、いずれ、そう遠くない将来に皆様にもパブリックコメントをいただける形になると考えております。ただ、近々JCSの第9版へ改訂が予想されており、その動向によっては若干作業時期がずれ込む可能性もあります。

いずれにしても、近い将来、検体の取り扱い・病名・病理検査報告書の記載事項などに関して統一の基準をお示しできるものになることを考えております。

雑誌委員会

委員長 門野岳史 (聖マリアンナ医科大学皮膚科)

Skin Cancer 誌は2023年度も予定通り年3回オンラインジャーナルとして発行することができました。一般演題からの症例報告に加えて、学術大会の特別講演や教育講演の内容も掲載されていますので是非ご利用ください。また、月間アクセス数ランキングをみてみると、かなり以前の論文がランキング入りしています。良い論文は時代を超えても価値が衰えないことが感じられます。近年は講演発表論文や新規投稿論文が減少傾向にあります。どうぞSkin Cancer 誌への投稿をお願いいたします。

事務局より

▼MSD 医学教育事業助成について

当学会は、MSD社の（公募型）医学教育事業助成に、令和6年の事業として「皮膚悪性腫瘍に関する若手育成事業」として応募をし、助成が決まりました。手術療法、薬物療法、診断、等の各分野のエキスパートによる学習コンテンツを作成し、本年6月以降に順次配信を開始します。詳細が決まりましたら、会員の皆様にメール等でお知らせいたします。

▼EADO G Affiliated Organization G承認について

本年より、当学会は European Association of Dermatology Oncology (EADO) G Affiliated Organization として連携することになりました。今回の提携により、相互に研究者同士の交流を盛んにし、EADO Congressでの共同ワークショップ等の機会が設けられます。今後、当学会会員はEADOへの入会に際してスポンサーは必要ありません。EADOの会員になりますと、EADO Congressの会員割引が受けられます。

▼賛助会員およびバナー広告を募集中です

令和5年度は、賛助会員として新たに5社が加わり、8社となりました。学会HPのオンラインジャーナルのページでのバナー広告は、現在7社にお願いしております。引き続き募集しておりますので、関係者の皆様にはどうぞよろしくお申し込み申し上げます。

▼令和5〜6年度若手トラベルグラント募集

当学会では、海外で開催される学会での発表を行う若手会員を支援するため、若手トラベルグラント制度を設けております。演題がアクセプトされた方は事務局まで応募ください。 http://www.skincancer.jp/young_travel_grant.html

(文責) 事務局 木庭幸子